

740

特242

839

# 民族の構造

—大東亞建設の基本問題—

大東亞民族研究室



\* 0006971000 \*

0006971-000

特242-839

民族の構造

大東亞民族研究室

昭和17

ABG

740

特242

839

# 民族の構造

—大東亞建設の基本問題—

大東亞民族研究室

特242  
839

◇目次

一、歴史の構成と民族……………一頁

二、民族及其の發展……………五頁

三、民族の構成的關係として個人……………一一頁

四、具體的人間の規律……………一八頁

五、アジア民族の開放と統一……………二二頁

歴史の形成と民族

戦争は常に思想的、政治的、経済的、社会的状態に異變を齎すものである、この異變は一回的異變ではなくして次ぎの歴史の段階へ轉位する契機としての異變である。だから戦争は新しい歴史の形成への契機であり、そして亦他面、よりよき文化への創造運動である。一九一四年から一九一八年に續く、五ヶ年に亘る第一次世界大戰が自由主義的規律形態の爛熟期への一線を劃した如く、昭和六年九月の滿洲事變に次いで、昭和十二年七月の支那事變から、昭和十六年十二月八日の大東亞戦争へ、そして我々の西方彼方では第二次歐洲大戰が闘はれつゝある。東西に於ける滿洲事變以來の日本の努力敢闘、西歐に於ける獨伊の膨脹運動は、人類の更に新しき歴史の段階への突入である。そして大東亞戦争以來の、ハワイ海戦、マレー沖海戦から始まる赫々たる皇軍の戦果は、獨伊兩國を主体とする西歐戦線に於ける躍進と共に、世界史創造の清新潑刺たる推進力である。これは中世ヨーロッパ文化の隆盛がローマ崩壊を契機とし、又近代デモクラシー時代がアメリカ合衆國の獨立宣言（一七七六年七月）から劃された如く、新しき秩序形態への人類の不斷の闘ひの一齣である。

一七八九年、フランス國民は專制封建國家形態から脱却して、封建的特權を廢し、人權宣言を國民議會に於て決議して新しき國民政治の形態に更新したが、これは封建的貴族政治理念から國民的

政治理念への發展である。斯くして凝集されたフランス民族の民族力はナポレオン時代出現の素地を形成したのである。封建經濟形態である手工業的家内産業形態に止まつてゐたプロシヤ、オーストリア、イタリー、スペイン等の古い經濟組織体と國家及社會形態の敗北であり、初期機械工業的經濟組織体のフランスの捷利である。それは封建思想に對する人權宣言に基く國家思想の勝利であり、更に貴族的專制政治形態に對する國民政治の捷利であつた。他面イギリスとのナポレオンの闘争は世界秩序への闘ひであつた。併し乍ら其のナポレオンも、世界秩序規定の新しい基底である船舶と工業の前には敗れ去らざるを得なかつた。

亦、第一次世界大戰に就いて觀るに、それはナポレオン戦争後に確立の端緒に就いた商業的世界秩序、即ちイギリスを主唱者とする船舶と工業を手段とする自由主義的世界規定形態の完成への闘ひであり、帝國主義的支配欲の闘ひであつた。従つてこの闘ひの勝利者は民族自決、民族自由主義を高唱することに依つて自己の行爲を正當化した。經濟的には他民族を分散して配置することによつて隷屬的關係に置くやうな形態を探ることに腐心した。斯くして大戰後の英國がフランスや大戰中に急速に發展して一躍世界の債權國に擡上つた米國と共に、彼等に都合の良い抽象的な自由主義理念を振り翳して「金」を基本とする世界經濟の建設に努力し來つたのは當然である。國際聯盟的形態に依つて贏ち得た世界秩序の現状を保持せんとしたのは最好適なる表現である。かくして第

一次世界大戰の意義は十九世紀文明の絶頂たる表現であると云ふことが出来る。全人類の生存の保證と發展の保證かなされる世界秩序に於てのみ人類は、その秩序を保證するものである。或る世界秩序が人類から支持されるのは、その秩序が世界文化への貢獻を是認されるからである。そして其の秩序が、其の秩序維持勢力たる一民族或は一國家の利益と專制にのみ放任される場合には、やがて其の秩序は舊きものとして過ぎ去るに至るのである。自由主義的世界秩序も、それが全人類に眞の自由と自發性を附與する間は人類に支持され、歴史の是認する秩序たるのである。併しそれが諸民族、國家の自由と自發性を抑制するに至れば、亦其の世界秩序たるの價値を否定されるに至るのである。この意味に於て第一次世界大戰は自由主義文明の飛躍的發展を示すものであると同時に、又自由主義文明が其れ自身の中に胚胎する矛盾をも成長せしめて、やがて崩壊期への突進をも意味するものであつた。

歴史は常に新しき理念に規定され、新しき創造に向つて進展する。この意味に於て第一次世界大戰は第二次大戰への素地を作つて、自由主義文明崩壊への第一步を踏み出したものであると言ふべきである。斯くして新しき歴史の建設の槌音が聞えねばならないことは歴史の必然である。そしてその新しき歴史の建設の槌音は滿洲に於て、日本民族の手によつて遂行された。滿洲事變は更に支那事變へ、そして更に大東亞戦争へ。西歐に於ても伊國のエチオピア戦争、獨國の擴大に依り、ヨ

ヨーロッパの全域亦戦火に包まれるに至つた。第一次大戦後に於て發展せしめられた規律形態は更に新しき形態への準備であつたことを意味する。

「人間が人間である以上、そして人間自身が絶滅しない限り人間の闘争は無くなるものではない」人類の歴史は凡べて闘ひと必然とより生ずる、そしてそれは常に新しき文化の獲得への不斷の精進である。ナポレオン戦争が新しき文化への精進であつた如く、第一次世界大戦がより高き文化への闘ひであつた如く、闘ひによつて人類は進歩し、そして新しき思想、政治、經濟の形態へと脱皮して行くのである。

闘ひは常に危機を内包する。併し人類は危機を突破して始めて、よりよき文化を獲得することが出来る。そして、より高き文化の獲得は更によりよき文化への闘ひを開始し、そして更に新しき危機に直面する。その絶えざる困苦を絶えず積極的に闘ひ抜き、これを克服し得た民族が人類を指導し、人類の支持し歴史の承認する世界秩序を規定する民族となり、其の世紀の文化を規定する民族となるのである。

## 二、民族及其の發展

民族と云ふ言葉は種々の意味に使用されてゐる。その持つ異なる意味が又混同されてゐる。一般に民族と云ふ概念には、アジア民族とかヨーロッパ民族が、有色人種とか白色人種と同一視される如く、又漢民族、滿洲民族、インドネシヤ民族、スラブ民族、ゲルマン民族、ラテン民族、アングロ、サクソン民族等々その人種的類別を指稱する。この意味の民族は血液や骨髄や、或ひは頭の形態の如き生理學的類別である。従つてそれは生理學的自然科學的類型であると云ふことが出来る。

従つて文化概念としての民族の意義は右の生理學的類型に基いては樹立出来得ないのである。成程生理學的類似性も同一集團としての意識の基底とはなり得るが、併しそれは同類意識の一つの條件に止まるものであつてその全部とは到底なり得ない。イギリスを逐放されて新大陸にアメリカ合衆國を建設したアングロ、サクソンの一分派は、アメリカ獨立の爲めに同じ血のアングロ、サクソン民族たる英本國と戦つてゐる。従つて我々は同一人種が同一民族を意味しないことを示すと共に其の反面亦、第一次大戦の結果によつて分割されたゲルマン民族の如く、又アングロサクソン人種が英國と米國とに分離してゐる如く、一民族乃至一人種が一の結合体として存在するとも確言出来得ない。

民族性が一の結合体乃至は綜合体として存在する爲めには、右の様な人種的類型をのみ基調とすることは出来ないのである。従つて自然科學的概念たる人種の問題と、文化的概念たる民族とは嚴に區別して論じられなければならない。二千六百有餘年の光輝ある歴史に燦然としてゐる日本民族も天孫民族を中心に幾多の種族が練成され凝集された民族である。インドネシヤ人種の一分派であると稱される卑人、熊襲、肥人等の瘠猛な人種や、現在支那奥地に居る猫族、朝鮮半島を経て日本に上陸したと言はれるアイヌ、沿海州を北上し更に樺太から南下したと言はれる別派のアイヌ種族そして又別派の天孫民族と云はれる出雲民族等々の異種族が天孫民族の中に混然融合して發展せしめられたのが日本民族である。

従つて民族は歴史の産物であると云ふことが出来るのである。それは歴史の發展過程に於て結合された家族体である。換言すれば、或る一定空間を生活圏とする人々が、縦斷的には中心に求心され、横斷的には運命を共同にすることによつて結合された歴史的統一體である。この歴史的統一體を構成する人々が各々其の血液型や頭蓋骨の計數を同一にしなくともよいのである。個々の日本人は地域によつてそれぞれ頭蓋骨の計數を異にしてゐる、しかも人種學上日本民族のこの状態は非常に複雑してゐると云はれるが、我々が日本人たることには一向に差支へがないのである、ナチス、ドイツは血の純潔を叫び、ゲルマン民族の血の純性と云ふことを政治理念の一つとして掲げてゐる

が、ドイツ人の血液を分拆してみると純粹なゲルマン民族の血液は實に五パーセント程度のものであると云ふことが解つた。これはナチス自らの告白である。ゲルマン民族の純性はユダヤ人追放やドイツ民族の神性を求めんとする方途に過ぎなかつたのである。

凡ゆる生物は、自己の生命を維持する爲めには積極的に自然に働きかけて、自然から自己の生命維持に必要な要素を吸収し獲得して行かなければならない。人類も亦、自己の生命と種の永遠性を維持する爲めには、一方自然に順應しつゝ、他面自然に働きかけて、生命維持に必要な要素を獲得して行かなければならない。斯くの如く宇宙の凡ゆるものは他を化育すると同時に、常に生成し發展するものである。人類も亦單に消極的に生命維持にのみ止まるものではなくて、常に遠心的に發展形態を採る。人類は集團として歴史を形成する。かくして原始人類は生命體として結合する種族として歴史の展開に立ち現はれる。其の種族が生成し發展して行く爲めの自然の要素は第一に地域的生活圏である。生活素材の貯藏はやがて發展要素として置換される。かくして彼等の生活圏は擴大され或ひは移動せしめられねばならなくなる。そこで他の生命體たる種族乃至民族との接觸の可能性が存する譯である。茲に於て、各種族は必然的に相互に對立せしめられ、鬭争の過程に於て自己の生命を維持し、發展せしめねばならない。乍併この鬭争過程に依る生命維持方式は一方の種族の高次の文化に包攝されるやうになる。それは武力征服と云ふ形に爲される場合もあらう。

かくして高次の種族文化の色彩に於て、この二つの生命体たる種族は、二種族の生活圏を結合して統一された生活空間を確立するに至る。それは兩種族の對立關係、緊張關係から高次の共同性を探る形態への移行である。それは又、交通技術の發達による生活空間の擴大の可能性と人類のもつ同化力とに關聯せしめられるのである。斯くして種族は新しい中心に、民族と云ふ協同態の形態を採るに至る。かくの如き協同態は歴史の進展に伴つて、組織的なもの、若しくは利益共同体と云はれるものではなくして、運命的生命的なものに迄結合され、一体化される。

この場合積極的に他種族を包攝し得る力を有する種族は高次の文化を有する種族である。即ち、生命力の發展と生活空間の擴大によつて、高次の文化力は低き文化力を向上せしめる力を有するものである。かくして被包攝種族の文化は高次文化種族の文化に參與し、より新しき民族文化の建設に参加するに至るのである。新しく建設された民族文化は更に新しき中心の下に擴大されて建設せしめられるのである。種族は民族へ、そして民族は更に大きな統一体へと運動するのである。茲に人類の發展と歴史の必然性があり、高次の運命的協同態への發展の由因がある。かくして生命共同体とも云ふべき種族は運命協同態たる全一体の民族に飛躍し、より高度なる民族文化に發展する形態を採るのである。

更に、人類の物心兩方面に於ける生活の複雑化は民族の生活圏に新しい意義を求めらるやうになる。

他面その發展力は生活圏の擴大を要請するやうになる。交通機關の飛躍的發達は民族の斯る要請にマツチして、その生活空間の擴大の可能性が生じて來たのである。例へば且つて海洋は各生活圏を隔絶するものとして存在した。併し船舶の發達その噸量の飛躍的増大は海洋の有する隔離的性格を一變せしめて結合的性格たらしめるに至つたのである。これは或る民族の生活空間の擴大の可能性と、新しく統一された生活空間の確立の可能性を示すものである。かくして一民族は自己の生命の維持と發展の爲めに、他の民族とより大きな協同態的聯關を求めんとするに至るのである。

昨年十二月八日を機として、日本民族の理想の問題からアジア民族の現實の問題として展開されつゝある大東亞共榮圈建設の問題も、アジア的統一的生活空間の確立運動である。それはアジア空間の諸民族が運命共同の聯關に於て結合せんとする運動であり、これは現在の段階に於ては民族以上の体制のものであるが、將來に於ては一つの運命協同態としての民族空間に充足されるアジア民族となり得るものである。従つてアジアの地理的空間に於ける東亞諸民族としてでなく東亞の諸民族に超越する全体民族に綜合され、その文化綜合体たる大東亞民族として綜合された時に初めて大東亞の新秩序は正しく創造されたものと言ふべきである。併し乍ら、この東亞の新しき体制は現在破壊されつゝある秩序即ち自由主義的秩序規程を打破して、アジア民族の解放が前提とならなければならぬことは當然である。大東亞戦争がアジア民族の民族解放戦であると云はれるのは

この意味である。しかし、アジア民族解放戦としての大東亞戦争の意義は問題の一面である。即ち大東亞戦争は大東亞民族の創造運動としての本質を有するものである。この創造運動としての本質は御稜威の世界光被と云ふ言葉を以つて表現されてゐる。そして亦、八紘一字を以つて現はされてゐる。それは單に日本精神の觀念的押賣りではない。もつと具体的な歴史的必然としての問題である。それは日本民族の一方的國家意思による世界秩序の規定と云ふことではなくして、飽くまでも各民族各國家をして其の所を得せしめて、生成發展せしめんとするものである。かくしてアジアの地理的空間に充足される文化はアジア自身の文化として、アジアの民族空間たらねばならないのである。アジアを統一的生活空間としてアジア民族空間に結合し、アジア民族文化として表現されることである。

民族は歴史の産物であり、この意味の民族のみが人類發展の原動力であることは前述の通りである。更に或る一民族の發展として其の民族の民族文化を安定勢力又は秩序規整力とする大民族、例へば右に述べたアジア民族やヨーロッパ新秩序に規定されるヨーロッパ圏の民族の構造も亦單に觀念的構成体ではない。茲に於て我々は民族の構造には、自由主義的一切の要素が拂拭されねばならないことを明示することが出来るのである。我々は支那事變を滿五ヶ年に互つて闘つて來た。それは現象的には蔣介石を主班とする支那との戦争であつたが、事變は自由主義的色彩としての支那政

府との戦争であつた。従つて自由主義的秩序の世界史的使命が崩壊することによつて、自由主義的色彩が否定されることによつて、日支の兩民族は其の地理的歴史的聯關性に従つて結合されるに至るべきことは當然である。このことは亦アジアの諸民族と日本民族との間に、又アジア諸民族相互に妥當することである。かくして、この地理的歴史的聯關性の正しき把握が人類の平和獲得の爲めの前提である。それは亦民族の正しき構造の確立を先驅としなければならぬ。

### 三、民族の構成的關係としての個人

生命共同体たる種族は、運命協同態若しくは家族態たる全一の民族に飛躍し、そして民族は國家として体系附けられる、従つて國家は民族の現象形態である。即ち、民族が發展の態様であり、歴史形成の具体的擔當者であるならば、國家はその擔當者の法的規定である。この意味に於ける國家は所謂民族國家であり、高度國防國家である。併し乍ら、中世的カント哲學を基礎とする所謂自由主義的國家觀は、斯かる民族の表現としての國家を否定し、個人の總合としての國家として觀念した。

右の様な對立する二種の國家觀は、二種の世界觀に基いて展開されてゐる。個人を根源的なもの



とする世界観と全体たる國家を根源的所興とする世界観である。この問題は個人が如何に國家に關係付けられるかの問題である。それは個人の自由の問題として論じられてゐる。

個人の自由の問題は個人の全体に對する關係を契機とする。この場合前記の二種の人生觀乃至世界觀が豫想せられるのである。第一は個人、人格、個性の中に生命の實體を觀念し、全体は個人に從屬するものとせられる世界観である。個人の自由が第一義的所興とせられるので自由主義或ひは個人主義と稱せられる。個人主義に於ては人生の中心價值となるものは人格である。人間の持つ特性の抽象化せられ、昇華された人格である。個人の持つ個性的本質を餘す所なく發揮して其の持つ素質と能力とを最高度に育成し、斯くして小宇宙とも云ふべき圓滿具足の人格を作りあける事が我々の生活の眞義であるといふ。従つてこれは人格主義とでも稱し得る。故に物質的利己主義とは異なる。それにも不拘個人主義或ひは自由主義が物質的利己主義と關聯せしめられ或ひは同時に問題とせられるのは個人の全体的構成体との構成的關係を無視又は超越せしめる所にある。個人の價值を最高の價值とする個人主義にあつては他の一切の價值は個人に從屬するものである。従つて家族も民族も國民も國家も個人を中心とする價值であり、個人に奉仕するものである。斯くして我々の生活秩序は個人の個性發展以外にないと云ふ結論に到達する。併し乍ら「我々は日本人である」といふことに一片の疑念をも持たない。だが我々は日本人となるのに、生れる前に於て日本に生れた

と思つて日本に生れた譯ではない。又日本人たることを約束した譯でもない。我々が日本を祖國として生れたことは運命である。我々がこの「日本を祖國として生れた」と云ふ事實が我々の生活の總てを決定的たらしめる。しかもアジアの東海岸に孤狀を描いて太平洋に面し、北は千島列島から南は臺灣へと伸びる一連の島嶼とアジア大陸の一半島や其の他の島々で以つて形成された自然地理的地域に生れたといふだけの意味ではない。我々は日本を單に地理的に觀念するのではなくして、日本を祖國として把握するのである。悠久二千六百有餘年の輝く歴史に綴られたる日本民族の故郷としての日本を感得する。それは觀念附けられるものではなくして感得するものであり、我々の胸中に脈動するものである。従つて我々の生活の中心價值をなすものは祖國である。だから我々が日本民族と云ふ場合は一億の人間の單なる總計ではなくして日本人の全一体であり、個々の日本人は日本民族を構成する成員の一人である。それは組織的な總合体ではなくして運命的に結合された統一体である。運命を共感する全一体であり、遠く神代より始まつて現在に及び永遠の未來に發展する全一体の久遠の精神の中に我々は生きてゐる。我々は現在、我々の祖先から傳へられた光榮を更に我々の子孫にその光榮を受け渡すべき民族史の一頁に在る。従つて我々の云ふ自由と云ふものは個人の持つ特質と能力を祖國への奉仕の爲めに育成され發揮されるべきものとしての自由である。この奉公の自由は從來の權利觀念から演擇出來得ないものであり、それは權利でもなければ義務で

もない。我々が我々の歴史を通じて感得する使命感である。

かくして我々の世界観は、全体としての民族、國民、國家に生命の實體を把握せんとする世界観である。これは國家主義と稱することが出来る。全体性に歸一せしめんとする點に於て全体主義とも稱せられる。ドイツ、ナチスの國家社會主義も斯る觀點に立つてゐるものであるが、我々の國家觀とは異なる。即ち、我々の國家觀である皇道原理は畏れ多くも 天皇陛下に歸一し奉る全体原理であるが、ドイツの國家社會主義は全体性の獲得への敢闘の表現である。詳言すれば國家社會主義が全体と他の全体との對立に於て闘ひ取る原理であるに對して、皇道原理は包攝の原理である。「まつろはぬもの」を和<sup>ワ</sup>けてまつろはしめんとするは我が皇道原理にのみ輝く全体原理の眞髓である。

個人主義に於ては凡ての價値は人格に從屬するものであり、従つて國家も人間の持つ特性の育成發揮の保護者以外の何ものでもない。人間は元來自由であり、平等であるべきである。人間は天賦の人權を有し、その權利は何ものからも強制によつて制限され又は抑壓されるべきものではない。併し乍ら、個人の權利は社會關係に於て行使せらるべきものであるから各個人の行使する利益の衝突を調整しなければならぬ。茲に於てこの調整者として各個人の權利を保護し、各個人の利害を調整する役割を演ずる爲めに國家が必要となつて来る。この調整機關が即ち國家である。従つて國家

は國民の利害を察し、これに従つて調整する組織体である。

我々の生活は他人との交渉なしには當抵不可能である。人間が人間と共に生活して行く處に社會があり、そして國家あり民族がある。我々はこの社會と國家又は民族の一員として生活を營んでゐるのであるが、この二つの生活構造は各々異なる規定に規整せしめられてゐる。社會關係に於ける我々の生活構造は個と個との並列的構造であり、國家關係に於ては全体と個との立体的構造である。即ち社會關係の生活交渉に於ては、その生活交渉に高位する意志を持たない。例へば我々が一本のペンを求めんとする場合買手の意思によつて一圓と價格が決定されるものでもなければ、生産者の意思や賣手が一圓で賣りたいと思つて一圓で賣れるものでもない。それは社會一般に於ける需要供給の關係やその他によつて一本のペンが一圓と決定されるのである。この關係は即ち計畫的、統一的乃至は支配的統制意思による價格の決定ではなく、又社會關係に高位する統制意思に基く生活交渉の確定でもなく、社會關係に於ける生活構造に於て作用する關係的力によつて確立され決定される。従つて社會は其の儘の姿に於てはそれ自体社會全体としての意思を持たず、社會關係を規律するものは社會に高次の意志ではなくして社會自然力でも云ふべき關係的力である。

この社會に於ける平面的關係的力は社會が人間の平面的並列的結び付き方であることに由因するものである。即ち、社會構造は個人の平面的機械的組織であり、それは自己の價値に他の價値を相

互に奉仕せしめるものである。従つて形式的抽象的には各人の自由平等が保證されるが、併し實質的にはこの社會の關係的力に積極的に働きかけ得る力を有する者が他を奉仕せしめることになる。こゝに階級闘争の萌芽がある。又一方この人間の生活交渉の社會構造が押し擴められ、社會の關係的力が人間の他の生活たる國家關係に優位するやうになると國家は全く人民の利害の調整者となるのである。更に社會構造を世界的規模に擴大してみるとこの間の事情が一層明らかとならう。自由主義的世界經濟が行はれた時に各國の多くの經濟事象は國境を越えて世界經濟の規律に従屬してゐた。従つて世界經濟から國民經濟を觀た場合に、それは世界經濟の一區劃の經濟であつた。しかも世界經濟を規律する力も意欲としての力ではなくして關係としての力であるから、世界的規模に於ける人間の秩序は世界的社會に於ける、關係的力とでも云ふべきものに規律せられたのである。従つて國家は世界的社會の一州であること、なる。そして亦國家は世界的社會に於て自然地理的區分により分割された特定地域の一般保護者と云ふことになる。國家は社會生活關係の法律の後見人であつて、國家意思による社會への干渉が排除せらるること、なる。

併し乍ら、この人間觀、社會觀、及國家觀は大きな錯誤を犯してゐる。それはまづ第一に人間性に對する誤謬である。人間を單に機械的に、生物學的に、又其の關係面を平面的に觀念してゐることこれである。第二に我々の結合體は單なる集團ではない。換言すれば個人の總計による集團では

なくして、目的を有して歴史を創造する民族であることを忘れてゐることである。個人は民族の一員として民族の歴史を綴り行くものであることを忘れてゐる。

人類は各々の國家、民族即ち全一體としての協同體の歴史の中に生きるものである。イギリスは其の民族の歴史があり、フランスにも、ギリシヤにも、ドイツにも、ローマにも、そして又アメリカにも、更に亦我々は我々の歴史を有してゐる。人類はそれぞれの屬する民族の有する歴史に従つて生活し、その歴史を常に新しく創造し形成して受け繼いで來た。かくして人間は民族の一員として發展せしめられる歴史に於ける存在である。従つて我々の生活構造も民族、國家の中に包攝されねばならない。これは即ち社會構造の國家構造への吸收である。こゝに於て社會に於ける關係的力は國家意思力によつて規律せられること、なる。例へば前の例に於てペンの價格は意思力によつて形成され確定されたのではなくして、社會に於ける關係的力によつて形成され決定されたのであるが、併し一本のペンが何らの利潤なくして賣られるにしても、これを生産せざれば全体目的を阻害する結果となるとすれば、八十錢の價格を以つても生産されねばならない。この利潤なくして賣る關係はこの賣買關係に高位に立つ意思に繋らねばならない。即ちこれは全体意思又は國家意思による統制意思である。これを經濟に觀ればこの關係を統制經濟と云ふ。即ち利潤と統制意思との關係を規整する經濟である。この關係が更に伸張され擴大されて國民の有する凡ゆる力が國家目的に

方向付けられ、民族の構成員の持つ力が纏て國家に包攝され凝集された場合にこの國家構造は民族國家或ひは高度國防國家の構造を有することになる。

茲に於て國家は單なる地域的な區分ではなくして民族を基底とするものとなり、國家全体が主体性を有する一つの生物の如く作爲し意欲するに至るのである。かくして個人は積極的に全体へ歸一した使命感によつて意義付けられ、社會的平面的關係に於ける生活構造は國家意思に統一され規律され、民族の發展によつて個人の發展が意義付けられることになるのである。かくして個人の創意は全体精神の原動力となり、全体精神は又個人精神を指導し結合せしめるのである。

#### 四、具體的人間の規律

人間は大地に生きるものである。このことは人間が大地の或るものから發生し、成長したものであることを意味するばかりでなく、更に人間は大地に育まれ、大地に立つことによつて思想し行爲するものであることを意味する。人間は土と一体となつて生きるものであり、土を基盤として發展するものである。人類の凡ゆる文化は大地に育ち、大地に於て發展して來たものであり、將來も亦大地を基盤として生成するものである。

そして人間は民族史の一頁に生き、民族は民族空間を基底とする生命体である。人間は自然の自然科学的恐怖に支配されるが、人間の能動性と主体性は自然を自己の環境として生活の基底たらしめる、人間と自然との關係は最早自然科学的關係ではなくして、自然は人間の發展の基底として置かれるのである。民族史の一頁に生きる人間の民族としての所與空間は民族空間として統一的生活空間を構成するのである。斯くして人間は發展の基底としての自然に民族としての綜合体の空間を構成して、民族史の形成に參與し發展せしめられるのである。

以上のことは我々の生活が第一次的に地理的制約下に在ることを意味する。地球の自然地理的要因は太古も現在も大して變化があつたものとは思はれない。太平洋も大西洋も、亞歐大陸もアメリカ大陸も、其の他の海も陸も、そして其等の氣候も、三千年前も現在もさう大して變化があつたものとは思はれない。従つて自然地理的要素は人類文化の發展に何らの關聯性がないやうに見える。人間と自然との關係が單に物理的關係であつたならば自然的影響のみの關係に止まり、人間は一般動物と同様な存在であつたらう。併し人間の自然との關係に於ける生活は、自然と相對し又は自然の中に包容される場合にも、人間は常に主体性のもとして積極的に自然に働きかける、この働きかけの現象、即ち人間と自然との相互關係は、主体性を有する人間即ち意欲を有する人間と自然との相互關係である。かくて三千年前と同様な自然に於て、人間は偉大なる文化を築きあげたのであ

る。即ち人間は生命の基盤としての自然と云ふ點に於て地理的制約を受けながら、しかもその地理的制約を發展の要素として轉換せしめるのである。

次に人間は大地を基底する民族の發展としての歴史的條件の制約下に生きてゐる。一切の文化は民族的國家的生活に於ける民族精神又は國民精神の創造的綜合の所産であるから、歴史も亦人類一般として發展、展開、形成せしめられるのではなくして、歴史を發展、展開、形成せしめるのは民族である。かくて我々は一箇の特定人として自然に對するのではなく、特定人としての我々は民族の中に包攝されて民族文化の發展に參與するのである。こゝに於て、民族文化の發展は自然に對して更に新しき働きかけをなし、新しき空間形象として空間を規定する。

我々は民族史の流れの瞬間に於て、地誌的、即ち空間性と歴史的、即ち時間性の相互關係の中に生き、そして民族は時間性と空間性の相互作用を推進せしめ、擴大せしめる事に依つて發展せしめられるのである。人類の祖先は喉を潤ほす以外に水の本質を知らなかつに違ひない。それから幾百年かの後釣針を發明した我々の祖先は魚を獲ることを知るやうになつた。次ぎに舟を發明して河を交通の便ならしめた。向ふ河岸の獲物を採る障害であつた河が便利なしかも虎やライオンや陸上動物からの危険のない安全通路となつた。斯くして對岸に對する人間の意欲は、舟を繰つて河を利用することによつて、彼等の生活圏を彼岸に迄新しく擴大した。彼等の技術と意欲は河を下航して海

岸に達した。河を渡る舟を發明した人類はやがて海を渡る船を造ることが出來た。かくして舟の發明によつて河の性質が變つた如く、船の發明は海の有する隔離性を結合性として變貌せしめ、海の彼方と結ばれるやうになつた。

ペルリ以前の太平洋は日本と、アメリカとの文化交流を遮斷するものであり、アジアとアメリカとの交通の障壁であつた。又ヨーロッパと東亞との地理的隔離は日英同盟を可能ならしめた。作し日本民族の主体性の自覺と相俟つて、交通技術の發展は距離感を著しく短縮し、太平洋は日本の發展力とアメリカ勢力との接觸海面となり、イギリスとの接觸線も亦擴大された。斯くの如く海洋の隔離性は超克されて結合性となり人類の前に其の地誌的相貌を變じて來た。この時間性と空間性と相互作用の内に發展する人類の發展事實を我々は看過してはならない。世界新秩序への敢闘も亦この空間と時間との相互作用の正當的發展への努力に外ならない。

自由主義的秩序の崩壞の原因は人間の抽象化である。自由主義は人間から故郷を奪ひ、歴史を奪ひ、人間を浮遊する藻草の様なものにした。利潤の追求は彼等の故郷を荒廢に歸せしめ、彼等を金銭の亡者たらしめた。綜合の力と術を持たない自由主義秩序は民族を分解し、人間から意欲を喪失せしめた。

かくして世界新秩序への人類の敢闘は世界史の命令である。それは人間と土との結合性の正當的

把握とそれに基く地理的要因と歴史的要因との調整的發展である。これは人間と土との遊離、空間と時間との相互作用を否定する結果となつた自由主義文化の抽象性より具体的人間の規律への發展である。

## 五、アジア民族の開放と統一

從來アジア民族の解放、人種平等の運動がアジア民族の間に提唱されたが、かゝる解放運動はアジア民族の自決乃至白人の政治支配より脱して人種平等論に立脚してのアジア民族の獨立運動であつた。それは人種平等の言葉に表現されてゐる如く、白人種との平等權の獲得運動であつて一種の倫理運動である。假に斯る平等權が獲得されたにしても、それは形式的平等權にしか過ぎず英米的秩序に於ける平等に外ならない。これは民族自由主義又は民族個人主義を基底とするものであつて人種の抽象的平等論に立脚するものである。乍併、一國內に於て、形式的抽象的平等の原理を基調とする自由主義的資本主義社會に於て必然的に階級闘争を惹起し、契約の自由が經濟的優者の保護手段となり終つたと同様に、民族の形式的抽象的自由平等の原理に基く民族自由主義は種族社會とでも云ふべきもの、構成であり、種族と種族との對立關係であつて連關々係の規定ではない。

従つて強大民族と弱小民族との對立關係として現はれ、實質的には支配被支配の關係であり、經濟的には搾取被搾取の關係に外ならない。従つて人種平等論に基くアジア解放運動は、これが實現を見たにしても結局アジア民族の自主性の獲得にはほど遠いものである。

自由主義はその發展期に於て中世の封建的專制の重壓から個人を解放し、個人に自由と平等を附與し、個人の自主性を獲得せしめた。これは實に劃期的な發展を齎した。然しか、る機械的形式的自由平等觀は結局中世的專制からの解放の原理であつて、全体を把握することは出来なかつた。全体は人間の單なる機械的な總合ではなく、平面的な人間の總計でもなく、他面又全体の機關的存在でもない。人間は自主性と目的性を有するものであつて、自由と平等を有しなければならぬが併し自由と平等を有すると共に全体の構成分子として全体との關聯に於ける機能を有するものである。個人は各個人の機能によつて躍動する全体を構成するものとして存するのである。従つて全体と個人はその關係の形式は有機體であるが、その作用の關係は運命協同態である。そして運命協同態が中心に求心されて一体化されたものが民族として發現される。

民族と民族との關係も又同様な關係にあると云える。第一に民族の自主性と目的性は相互に尊重され承認されねばならない。一民族の他民族への帝國主義的支配は人類文化向上の規定たるものでないことは勿論であり、双方の民族文化のよりよき發展を導くものではない。大東亞新秩序の規定

も日本の他の東亞諸民族に對する帝國主義的支配であつてはならない。又東亞諸民族の民族自由主義に基いて東亞が關係附けられるものでもない。即ち支那及其他の東亞諸民族を殖民地又は半殖民地から解放して彼等に獨立性と自主性を保持せしめねばならないが、これの形式的な附與のみでは結局それは強大民族と弱小民族との對立關係の助長に終る。更に亦、東亞新秩序は東亞諸國聯合の規定でもない。國際聯盟の東亞に於ける再現や東亞ブロック論では大東亞全体としての運命の協同性は生れて來ない。平面的共同や利益的共同による聯合の秩序では大東亞全体性若しくは統一性を單に觀念するのみであつて、結局東亞を結合する力は權力と武力以外にないこと、なつて、眞の大東亞全体性を見失ふこと、なる。

だが然し東亞諸民族の民族主義は認められねばならない。しかしこの民族主義は民族自由主義ではなくして、大東亞全体の機能の運動としての民族主義である。例へば支那の民族運動に對して日本は指導と援助を附與して中華民族として自主性の獲得を支援しなければならぬが、中華民族の獨立と日本が相對立するが如き獨立であつてはならない。支那の獨立は大東亞全体を構成して一つの機能を擔當すべきものとして完成されねばならない。故に民族主義は大東亞綜合としての大東亞民族運動の一環として運動すること、なり、大東亞諸民族の統一は大東亞全体性の民族への發展過程の規定たるものとなる。

かくして一國內に於ける個人が自由と平等を有しつゝ、その機能に於て全体を爲して民族を形成する如く、大東亞諸民族は自由と平等を有し獨立性自主性目的性を有しつゝ、其の機能に於て大東亞民族を形成するのである。更に具体的に言えば、生成發展萬物化育修理固成の生命原理と八紘爲宇の發展原理に綜合された日本民族的空間規定が大東亞に於ける空間規定たることである。それは勿論日本精神の押賣ではない。諸民族諸國家をして各々其の機能に従ひて其の所を得しめ、正しい人類文化の發展に寄與せしめんとするものである。茲に於て從來の大東亞諸民族の在り方が根本的に變革される。從來の東亞諸民族が日本を別して、英米等の殖民地乃至半殖民地として箇々バラバラの複合社會を強制されて自己の生活と意思を奪はれて來たのを白人の支配搾取から脱却して自己の意思と生活を持ち、各自の文化を形成する機會が今こそ當來したのである。換言すれば個々バラバラに遠心的に存在してゐた諸民族が大東亞民族として求心的に存在することによつて獨立性と自主性と目的性を有すること、なり、自己の民族歴史を形成しつゝ、大東亞民族としての在り方を獲得することである。

その爲めに共同の空間意識と運命の共同感の正しき認識が要請される。大東亞諸地域が隣接して存することは運命である。また諸地域はそれぞれの機能によつて相互に依據しなければならぬことも運命である。大東亞諸國の連帶關係による能動なくしては、且つての有色人種解放運動の如く

424  
377

昭和十七年六月二十日印刷 昭和十七年六月廿五日發行	
<b>大東亞民族研究室</b>	
神奈川縣小田原市幸一丁目一三九 編輯發行人 小野二郎	神奈川縣小田原市幸一丁目三〇 印刷人(東神七) 徳山義一
神奈川縣小田原市幸一丁目三〇 印刷所 小田原印刷社 電話四三三番	
<b>非 賣 品</b>	

遂に共同の發展と向上の可能性を期待することは出来ない。かゝる運命の共感によつて結ばれたる大東亞全一となること、このことが、大東亞空間を統一的生活空間たらしめるのである。従來の東亞空間は米英等に數條の線に外延的に結ばれてゐた。それは英米等の秩序空間であつて大東亞自身の秩序空間ではなかつた。従つてこれは嚴格に言えば東亞空間ではなくして西歐的空間の東亞に於ける規定である。これは東亞諸民族が自己の空間を持たなかつたことを意味するもので、かゝることは東亞諸民族の分解を招來する。日支兩民族の五ヶ年に互る戦争が之を雄辨に物語つてゐる。東印度に於ける複合社會の如きも亦その例證である。自己の秩序空間への敢闘がなされ、自己の民族史への反省がなされねばならない。自己の空間獲得は必然的に大東亞民族への求心運動を展開せしめる。それは大東亞空間への反省となつて發現され、こゝに共同の空間意識醸成がある。かくして必然的に大東亞諸民族は共同の運命の下に規整され、協力と共榮の擔當者となり得るのである。斯る大東亞諸民族の統一的生活空間又は大東亞民族の空間は觀念のものではなく、具体的に獲得されねばならない。それはまづ大東亞戦争の完遂に外ならない。



